張恨水・林語堂の北京イメージ
――『金粉世家』『啼笑因縁』と『北京好日』[1] との比較研究

王 暁白

一　はじめに

中国南方出身の文学者が北京に対し独特なアイデンティティーを形成することは意味深い文化現象といえる。1928 年以後の中華民国時代後半の北京は北平と呼ばれ首都の地位を失ったとはいえ，周作人，郁達夫，林語堂，張恨水などの文学者たちによる賛美や興味深い描写の執筆が続いていた。老舎のような北京出身の作家による描写とは異なり，彼らの北京に対する描写には北京居住の他地域出身者の共感を呼ぶ表現が見られる。それは，伝統的北京が近代化していく過程において，外来者にとっての北京イメージの形成とも重なるものであろう。

張恨水（1895 － 1967）は新聞編集者兼作家として民国期の北京（北平）に前後二十年にわたって滞在し（1919 － 36，1946-67），数多くの北京に関する作品を残した。彼は安徽省潜山県出身，伝統小説を愛読し，1919 年 24 歳の時に北京へ行き，新聞業に従事した。新聞記者や編集者として活躍した彼は北京の社会，風俗，民情，地理などを熟知して，主に北京を背景とした数多くの名作を創作し，文壇の名家となった。『金粉世家』は 1927 － 32 年北平「世界日報」で連載発表された，20 年代の北京を背景とする長編小説である。『啼笑因縁』は 1930 年に上海「新聞報」文芸欄で連載された北京を背景とする小説で，その後ベストセラーとなり，張のもっ

1）　英語原題 *Moment in Peking*, New York: John Day, 1939.『北京好日』は 1940 年四季書房出版小田岳夫訳の日本語訳題。本論文は張振玉の中文訳本『京華煙雲』（『林語堂名著全集』，東北師範大学出版社 1994 年）を『北京好日』のテクストとする。

とも重要な代表作である。

林語堂（1895 − 1976）は福建省龍溪県（今の漳州）出身，キリスト教系の学校で学び，1911 年に上海のセント・ジョンズ大学に入学，1916 年に卒業，1916 − 19 年に北京の清華学校で英語教師として働いた。1919 年アメリカに渡りハーバード大学で言語学を専攻，続けてドイツのライプツィヒ大学・イエナ大学でも研究を続けて博士の学位を得たのち，1923 − 26 年に北京大学の英語学教授として教鞭をとった。30 年代は主に上海で文学活動に従事し，1936 年アメリカへ移住する前に北京を一回短期訪問した。彼の北京滞在は 6 年前後だったが，北京の文芸誌『語糸』は彼の文学活動の場としてかなり重要であり，自身も北京を描写し，賛美する数多くのエッセーや小説を執筆した。『北京好日』は中日戦争勃発後の 1938 − 39 年にフランス，アメリカで創作され，1900 年代― 30 年代の北京を主要な舞台として，世界的に名声を博した英語小説である。

なぜ本論文はこの両作家の三作を比較研究の対象とするのか。第一の理由は，張と林とはいずれも南方小村の出身であるが，張が伝統的気風に富む村で生まれ，先祖が地方の武官であったのに対し，林は父がキリスト教の牧師で，キリスト教色の強い台湾海峡沿海地域の村で成長し，キリスト教系の学校教育を受けていた。張がまず伝統文人として育ち現代的新聞人となったのに対し，林はキリスト教徒として育ったのち，現代的文化界で活躍する学者・作家となった。このように文化的背景に「中国的」と「西洋的」という違いはあるが，両者はいずれも北京をいきいきと描写し，北京に対する親近感，愛慕と賛美を表した。第二の理由は，二人の作品は，『金粉世家』も『北京好日』も同じく北京居住の南方出身の大家族の面々を描写しており，両者が意識的に『紅楼夢』を手本とした長編であることも共通する[2)]。ただし，『金粉世家』は北京の新聞に連載され，北京を熟

2） 林は自ら『北京好日』と『紅楼夢』との各人物間に対照関係があると述べている。施建偉『林語堂在海外』百花文芸出版社 1992 年 49-50 頁を参照。『金粉世家』と『紅楼夢』の関係については王兆勝「『金粉世家』と『紅楼夢』」『東北師大学報（哲学社会科学版）』2003（3）を参照。

知した北京の読者向けの娯楽小説であったのに対し，『北京好日』は抗日戦争期に西洋人に向けて，北京人の暮らしを紹介し，日本の中国侵略の不当性を訴えるため，英語で創作された。両作の比較研究に際しては，張のもう一つの代表作『啼笑因縁』も考察の対象に入れたほうがよいと思われる。『啼笑因縁』は「新聞報」文芸欄の編集者である厳独鶴の要請で上海で発表され，主に南方読者向けに，北京を紹介した小説である。それ以前，張が上海で発表した作品は少なく[3]，『啼笑因縁』は張が上海文壇に入るための重要な一歩だったといえる。同作をめぐるこのような事情は林が初めて書いた小説，『北京好日』により小説家として西洋人の視野に入った[4]こととは類似しているため，よい参照となるであろう。

先行研究のテーマは，主に「林語堂と北京」に集中し[5]，「張恨水と北京」に関する論文は比較的少ない。その中で筆者がもっとも注目しているのは李在珉の博士論文「老舎と張恨水の北京記述と想像」である[6]。この論文は，二人の作家の作品のなかに体現された北京地図を整理して，「東西南北城」「住居空間」「外部交流空間」と分類し，北京土着の老舎と外来者の張恨水と「北京地図」がどのように異なるかについて論じており，作家の生活の経歴と都市空間認識との関係についての分析は興味深い。ただし，都市空間の分類はやや大まかで，二作家のそれぞれ都市空間イメージの構成の違いが十分には検討されていない。

本論文は，張恨水と林語堂とそれぞれの長編三作品を例として，それぞ

3） 張恨水「写作生涯回憶」二十。張占国ら編集：『張恨水研究資料』，天津人民出版社 1986 年，頁 42。

4） 林語堂がアメリカでそれぞれ 1935 年と 1937 年出版したエッセー集 My Country and My People（『わが国土・わが国民』）と The Importance of Living（『生活の発見』）はいずれもベストセラーとなった。両書に続く 1939 年の『北京好日』によって「ここに小説家として確固たる地歩を占めた」という。合山究「全盛期の林語堂――アメリカにおける圧倒的成功」，『樋口進先生古稀記念中国現代文学論集』所収，福岡・中国書店，1990 年。

5） 宋伟杰「既“远”且“近”的目光」（『現代中国』2004，81-102 頁）に参照。

6） 李在珉「老舎与张恨水的北京叙述和想象」北京大学中文系博士論文 2006 年。

れの立場，経験，背景から見る北京イメージを主にケヴィン・リンチ『都市のイメージ』の方法を援用しながら整理し比較して，1930年代までの北京イメージ形成の要素を分析する。具体的な作業としては，まず各作登場人物の活動場所と各作が言及する地名を整理分類し，各作品に基づく北京地図を作成したのち，この北京イメージ地図と作家自身の北京経験および北京の都市環境とがどのような影響関係を有するのかを検討したい。

二　小説のなかの都市空間

（一）総合評価

まず，この三作における北京イメージの総合的な描写と評価を取り上げてみよう。

In that city, man lives in civilization and yet in nature, where the maximum comforts of the city and the beauties of rural life are perfectly blended and preserved, where, as in the ideal city, man finds both stimulation for his mind and repose for his soul.

The city was planned by a master architect as no other city was ever planned on this earth.

在北京，人生活在文化之中，却同时又生活在大自然之内，城市生活极高度之舒适与园林生活之美，融合为一体，保存而未失，犹如在有理想的城市，头脑思想得到刺激，心灵情绪得到宁静。

设计这个城市的是个巧夺天工的巨匠，造出的这个城市，普天之下，地球之上，没有别的城市可与比拟。

（北京好日，12）

以上のように林語堂が紙幅を割いて北京を絶賛する際に「自然」を強調する点は注目に値する。山，川，湖の大自然に囲まれた北京では，園林生活を快適に送れるという描写は，特に近代都市在住読者の憧憬を誘うことであろう。実はこの「大自然」とは北京の前近代的一面だといってもよい。園林都市の反対は近代化，工業化した都市である。近代化途上にあった当時の中国において，上海のような近代化が進んだ都市を例外として，都市とは「自然」が豊かであるのが一般的であっただろう。だが，すで

に近代化，工業化の弊害に苦しんでいた西洋人に向かって，北京の「大自然」を描写することがいかに効果的であるかについて，欧米遊学の経歴をもつ林は，十分意識的であったと思われる。『北京好日』が「Books」「New York Times」「Time」のアメリカ各紙誌の書評で絶賛を得て，翌年にベストセラーとなった一因もこの点にあるだろう。

相传几百年下来的北京，而今改了北平，已失去那“首善之区”四个字的尊称。但是这里留下许多伟大的建筑，和很久的文化成绩，依然值得留恋。尤其是气候之佳，是别的都市花钱所买不到的。这里不象塞外那样苦寒，也不象江南那样苦热，……论到下雨，街道泥泞，房屋霉湿，日久不能出门一步，是南方人最苦恼的一件事。北平人遇到下雨，倒是一喜。这就因为一二十天遇不到一场雨，一雨之后，马上就晴，云净天空，尘土不扬，满城的空气，格外新鲜。北平人家，和南方人是反比例，屋子尽管小，院子必定大，“天井”二字，是不通用的。因为家家院子大，就到处有树木。你在雨霁之后，到西山去向下一看旧京，楼台宫阙，都半藏半隐，夹在绿树丛里，就觉得北方下雨是可欢迎的了。南方怕雨，又最怕的是黄梅天气。由旧历四月初以至五月中，几乎天天是雨。可是北平呢，依然是天晴，而且这边的温度低，那个时候，刚刚是海棠开后，杨柳浓时，正是黄金时代。

幾百年か永い間の名称を伝へてきた北京だつたが，いま北平と改められて，あの首善之区といふ四字の尊称も失われてしまった。然し，ここには多くの偉大な建築や，久しい文化の跡を留めて，昔ながらに親しまれる。とりわけ気候が尤もよく，他の都ではいくら金をかけても一寸購われまい。ここは塞外の様な苦寒もなく，江南の様な苦熱もなく，……雨が降ると路がぬかり，部屋がじめじめとして幾日も外出が出来ぬといふのは，南方人の苦痛の種だが，北平の人は雨に逢ふと，却つて嬉しがるのだ。それといふのは，十日も二十日も雨がないし，一雨来ても直ぐに霽れ上つて，澄み切つた空には塵も揚らず，満城の空気が殊の外すがすがしいからだ。北平の家はまた南方のとは全然反対で，住居は出来る丈け小さくして，庭をずつと大きくとるから，一寸中庭といふのは当らぬやうだ。そのやうに庭が大きく，到る処に樹木があるから，雨上りのあと，西山に行つてこの

古都を眺めていみたら，楼台宮闕は緑樹の間に半ば見え隠れて，まことに北方の雨の喜びを感じるであろう。南方では雨をいとふ。殊に梅雨の頃は，旧暦の四月の初から，五月の中頃まで雨ばかりであるが，然し北平は，依然として晴れ渡り，而もここの温度は高くなく，その頃に漸く海棠の花が開き，楊柳の色も濃く，まさに絶好の季節である[7]。

（啼笑因縁，1）

同じ，総合的な描写において，張恨水はこの引用文のように北京の気候の長所に重点を置いた。この短い一節に，「江南」「南方」「南方人」が4回ほど出現することは注目に値しよう。「南方」「江南」は張の出身地であるだけでなく，上海紙「新聞報」の読者の居住地でもある。張は北京滞在経験のない南方読者に北京の特徴を紹介する際に，多湿高温の気候を苦手とする南方人としての立場から，北京の気候の長所を強調したのである。

一方，『金粉世家』は北京についての総合的，全面的な描写や紹介をほとんど行わない。ただ，一部の地名に初めて言及するとき，紹介と解説をつけている。これは『啼笑因縁』や『北京好日』も多用している手法である。北京紙掲載の『金粉世家』の読者が，北京に関する情報を張と共有していたため，北京はすでにコンテクストのなかの存在で，全面的，総合的に紹介される必要はなかったのであろう。これに対し，『啼笑因縁』『北京好日』両作では，北京在住ではない読者向けの北京解説が散りばめられている。『北京好日』のアメリカにおける成功と類似し，『啼笑因縁』は1930年11月30日まで連載され，12月に単行本となり，1949年前に20刷以上発行された[8]。張自身も「这次南来，上至党国风流，下至风尘少女，一见着面，便问『啼笑因縁』」（今回南方滞在の間，上には国家の官員まで，下には芳いまで，私と会うとすぐ『啼笑因縁』のことを聞いた。）と述べている[9]。『啼笑因縁』は当時の南方読者の大好評を博したのである。

7） 日訳は飯塚朗訳『啼笑因縁』（生活社，1943年）による。

8） 張正『魂夢潜山——張恨水紀伝』，山西人民出版社2001年，頁165。

9） 張恨水「我的小説過程」，1931年1月27日—2月12日「上海画報」，張占国ら編集：『張恨水研究資料』，天津人民出版社1986年，頁275。

（二）視覚上の外部空間

都市イメージとは，周りの都市環境から影響を受けた住民が都市環境に対して蓄積する直接または間接的な経験と認識であり，想像と記憶により構成されるイメージでもある。つまり，都市空間の内在的反映である。ヴィン・リンチは『都市のイメージ』のなかで，以下のように論述している。「どんな都市にも，たくさんの個人のイメージが重なり合った結果としての一つのパブリック・イメージが存在するようである。あるいは，それぞれかなりの数の市民たちにより作られるパブリック・イメージがいくつか集まっているのかもしれない……各個人が描く心像はそれぞれ独自のものであり，その内容の一部はめったにまたは絶対に他人伝達されないということもあるのだが，大体においてそれは，パブリック・イメージに近いものなのである。」[10] リンチは，市民に対するインタビューに基づいて都市のイメージをパス，エッジ，ディストリクト，ノード，ランドマークの五つの種類に分類し概括する。リンチはこの五つの要素から都市計画の利害得失を評価する。リンチによりインタービューされた市民と類似して，作家は意識的に，あるいは無意識に都市に対する自らのイメージを作品のなかに表している。作品を作家に対するインタビューの結果と見なしてこれを分析整理することは，作家の都市イメージの考察に有用であろう。本論文では，考察対象の三作品のなかに出現する地名，場所をこの五つの種類に分類整理したい。その際，同一の地名が文脈によって異なったイメージとして現れることもある。例えば，天安門は外部から見られるときにはランドマークのイメージが強いのに対し，天安門広場内部で活動するときにはディストリクトのイメージが勝る。この場合，文脈によってべつべつに分類する。

1. パス

リンチによれば，「パス paths とは，観察者が日ごろあるいは時々通る，

10） ヴィン・リンチ著，丹下健三，富田玲子訳『都市のイメージ』，東京：岩波書店，2007。55 頁。

もしくは通る可能性のある道筋のことである。街路，散歩道，運送路，運河，鉄道などである。多くの人々にとっては，これらがイメージの支配的なエレメントになっている。人々は移動しながらその都市を観察している。そしてこうしたパスに沿ってその他のエレメントが配置され，関連付けられているのである。」[11] 本論文の考察対象作品においては，パスは一般的に「街」「橋」として現れる。「胡同」は住居空間であると同時に，「通る」という意味がつけられたとき，「パス」ともなっている。一方，「王府井大街」と言ったときには，その商業活動空間を指すことが多く，「通る」という意味となることは少ない。実は，単なる街の名前を言及することに比べて，真の「パス」は「順路」として働く存在と言ってもよい。どこからどのような順路に沿ってどこに到着する，という形の描写は，作家の都市に対する認識をもっともよく体現している。張恨水，林語堂のこの三作のなかのパスのイメージ例は以下の通りである。

到了西四牌楼，只见由西而来，往西而去的，比平常多了。……再往西走，……快到白塔寺……
西四牌楼に着くと，西から来たり，西へ行ったりする人がふだんより多いのが見える。……さらに西へ行くと，もうすぐ白塔寺に着く……（金粉世家 1）
由这里向南走便是先农坛的外坛。
ここから南へは先農壇の外壇である。（啼笑因縁 1）
The lake where Mr. Yao had taken the young people to see the flood was north of the Imperial Palace. It was only a quarter of an hour from their home. Going north from their house, they turned left at the street of Iron Lions and then along the northern wall of the Forbidden City until they saw the lake on their right.
姚先生带着几个年轻人去看的大水，是在紫禁城北边儿。由家去只走了十几分钟。由他们家往北走，到铁狮胡同往左转，然后顺着紫禁城的北墙走，不

11） 同上，頁 56。

久右边就看见那一片水，那一带水叫什刹海……（北京好日 16）

ただし，この三作において，順路の形で描写された「パス」は非常に少ない。その原因は以下のように推測できる。一つめの理由として，案内書とは異なって，読者が小説の人物の移動路線よりも，点としての活動場所にもっと興味をもつことがあげられる。そこで作家は文章の冗長さを避けるため，ストーリーに必要のない場合，順路を描写しない。二つ目の理由は，主人公は主に上流階級であり，馬車，車，人力車で移動することが多いので，歩行と異なって，順路をあまり意識しないということがある。三つ目の理由として，土着市民ではない張と林が，詳しい順路の描写に不得手であった可能性もある。

2. エッジ

リンチによれば，「エッジ edges とは，観察者がパスとしては用いない，あるいはパスとはみなさない，線状のエレメントをいう。……2つの局面の間にある境界であり，連続状態を中断する線状のもののことである。」[12] 北京のもっとも明らかな「エッジ」は城壁だといえよう。が，作品のなかで，直接城壁が描写，言及されることも非常に少ない。なぜなら，「エッジ」の「連続状態を中断する」性質を考えると，人物が都市のなかで活動するとき，特殊な場合以外は，なるべく「エッジ」を避ける傾向があるからではないだろうか。ただし，「エッジ」は常に人物の頭のなかに隠れた存在でもある。「城壁」は直接言及されないが，「城を出る」「城に入る」「城の内」「城の外」という形で常に人物の意識のなかに存在している。城壁以外，川も「エッジ」としてときに出現する。なお，1896 年には北京―天津向の鉄道が開通していたが，この三作において鉄道は，全然言及されていない。

3. ディストリクト

リンチによれば，「ディストリクト districts とは，中から大の大きさを

12） 同上。

もつ都市の部分であり，2次元の広がりをもつものとして考えられ，観察者は心の中で『その中に』はいるものであり，また何か独自な特徴がその内部の各所に共通して見られるために認識されるものである。」[13] ディストリクトは都市の独自性を表すもっとも重要なイメージといえよう。ディストリクトは三作のなかで公園，寺社，市場，遊覧地などとして多種多彩に描写されている。ディストリクトは北京のイメージをよく代表するといえる。

ディストリクトの多様性を考えると，さらに詳しい分類を必要とする。ディストリクトの環境的特徴には，山水系統，伝統建築，近代建築などがある。ディストリクトの機能的特徴には，商業空間，社交空間，娯楽空間などがある。グループによって異なるディストリクトには，上流階層の空間，下層民衆の空間，若者の空間などがある。

4. ノード

リンチによれば，「ノード node は点である。……観察者がその中にはいることができる点であり，彼がそこへ向かったり，そこから出発したりする強い焦点である。ノードとなるのは，まず第一に接合点である。すなわち交通が調子を変える地点，あるいは道路の交差点ないし集合点，あるいは一つの構造が他の構造にうつり変わる地点などである。」[14] 三作の中でノードは主に城門，牌楼（大通りの交差点に設置される）として現れ，紫禁城，内城，外城ないし北京城の外との結節点と，道の交差点として出現する。

5. ランドマーク

リンチによれば，「ランドマーク landmark も点を示すものであるが，この場合は観察者はその中に入らず，外部から見るのである。……何かランドマークとして用いるということは，必然的に，限りない多くの可能性

13） 同上，頁 57。

14） 同上。

の中から，あるひとつのエレメントをとりだすということを意味している。……それらは都市の内部にあるかもしれないし，またかなり遠くにあるために，あらゆる実際的な目的のために，一定の方位を示しているものもある。」[15] ランドマークの性質を考えると，ある特定の都市のランドマークはかなり明確である。三作のなかに，北京のランドマークは高い城楼がついた城門，塔，山などの高く，容易に見ることができるイメージである。

三作のなかの北京イメージをこの五要素に分類して，一覧表を作成すると以下のようになる。作成に際しては，以下の原則を立てた：①虚構の地名を除く。②小説の一章のなかに一つのイメージが繰り返し出現している場合，数次分を１回と数える。③地名に言及するだけでなく描写を伴う場合には別項を立てて数える。）

名　　前	出現回数	描写を伴う出現回数
『金粉世家』パス		
香山と八大処までの二つの大道（西直門外）	1	0
八大処大道（阜成門外）	1	0
前門大街	1	0
『金粉世家』エッジ		
城壁	1	0
『金粉世家』ディストリクト		
中央公園	17	0
西山	11	3
頤和園	5	2
北海	4	1

15）同上，頁 58。

東安市場	3	0
香山	2	1
海淀	2	0
厰甸	1	0
護国寺	1	0
湯山	1	0
火神廟	1	0
万牲園	1	0
東交民巷	1	0
白塔寺	1	1
『金粉世家』ノード		
西直門	3	0
阜成門	1	0
西四牌楼	1	0
東便門	1	0
西車駅，東車駅	1	0
『金粉世家』ランドマーク		
正陽門（前門）	2	0
北海の塔	1	0
総計	64	8

『啼笑因縁』

名　　前	回　　数	描写を伴う出現回数
『啼笑因縁』パス		
大喜胡同	6	0
東四三条胡同	1	0
水車胡同	1	0

『啼笑因縁』エッジ		
城壁	1	1
『啼笑因縁』ディストリクト		
中央公園	9	1
天橋	7	2
先農壇	7	3
北海	5	2
什刹海	4	1
北京飯店	4	2
西山	4	1
東嶽廟	1	0
陶然亭	1	0
玉泉山	1	0
故宮	1	0
頤和園	1	0
城南公園	1	0
中南海	1	0
『啼笑因縁』ノード		
後門（地安門）	5	0
車駅	2	0
四牌楼	1	0
西便門	1	0
東便門	1	0
『啼笑因縁』ランドマーク		
前門	2	0
鼓楼	1	0

中華門	1	0
天安門	1	0
総計	71	13

『北京好日』

名　　前	回　　数	描写を伴う出現回数
『北京好日』パス		
哈徳門大街	3	0
馬大人胡同	2	0
蘇州胡同	2	0
王府井大街	2	0
地安門大街	1	0
高亮橋	1	0
捕風橋	1	0
長安街	1	0
鉄獅胡同	1	0
『北京好日』エッジ		
永定河	1	0
城壁	1	0
『北京好日』ディストリクト		
西山	7	2
故宮	6	0
東交民巷	6	0
北京飯店	5	0
什刹海	3	1
天壇	3	0
円明園	3	1

中南海	3	0
隆福寺	2	0
孔廟	2	1
法源寺	2	0
北海	2	0
白雲観	2	1
天橋	2	1
頤和園	1	0
雍和宮	1	1
南河沿	1	0
八大胡同	1	0
城南遊芸園	1	0
東安市場	1	0
中央公園	1	1
香山	1	1
天安門広場	1	0
『北京好日』ノード		
東四牌楼	3	0
西直門	2	1
西便門	1	0
前門車駅	1	0
東華門	1	0
西四牌楼	1	0
哈徳門（崇文門）	1	0
東単牌楼	1	0
順治門（宣武門）	1	0

『北京好日』ランドマーク		
前門	4	0
鐘鼓楼	3	0
天安門	2	0
玉泉山	2	0
北海の塔	2	0
景山	1	0
万壽山	1	0
総計	100	11

以上の表によって，二人の作家が三作のなかで表した北京イメージの形成過程と原因を次のようにまとめられる。一般的に都市イメージの形成に影響を与える要素には，内部要素と外部要素の二つがあると認められている。内部要素は主体自身の経験や需要によるイメージ構成であるのに対し，外部要素は主体の外在環境認識によるイメージ構成である。張の内部要素としては，『金粉世家』『啼笑因縁』創作時点で，彼が 8 － 13 年の北京滞在経験をもち，西城西長安街と東城朝陽門とに住んだことがあり[16]，記者の仕事を通じて北京の各階層と知り合い交流していた点は重要であろう。それに対し，林は 1916 － 19 年に清華学校に勤めていたため，北京城から直線距離でも 7 キロ離れた西郊に住んでおり，北京語も『紅楼夢』を手本として学んだという[17]。その後，1923 － 26 年北京城内の故宮付近にある北京大学の教授に就任し東城の船板胡同に居住したものの，この期間には専ら大学と文学サロンという限られた空間で活動していた，というの

16） 張はエッセー「影樹月成図」で北京では未英胡同 36 号，大栅欄 12 号，大方家胡同 12 号の三つ所に居住したと述べている。厳粛編集『北京市街巷名称録』（群衆出版社 1986 年）によれば，未英胡同 36 号，大栅欄 12 号は西城西長安街付近，大方家胡同は東城朝陽門付近である。

17） 林語堂『八十自叙』。『林語堂名著全集 10』，東北師範大学出版社 1994 年，p271。

が林の内部要素である。北京滞在時間の長さ，活動地域と範囲の広さにおいて，林は遥か張に及ばない。この差異は両作家の三作品における都市イメージ描写にどのような影響を及ばしたのか。

まず，イメージの総数と出現した回数を整理すると，『金粉世家』では24種64回，その内描写を伴うものは8回，『啼笑因縁』では27種71回，その内描写を伴うものは13回，『北京好日』では50種100回，その内描写を伴うものは11回という出現状況がわかる。三作の中国語原作あるいは中訳本の字数はそれぞれ，『金粉世家』108万8000字，『啼笑因縁』31万1000字，『北京好日』66万6000字であり，そして『金粉世家』十万字あたり約6回，『啼笑因縁』十万字あたり約22回，『北京好日』十万字あたり約15回という状況である。『北京好日』は北京イメージの総数，頻度と描写の詳しさにおいて，『金粉世家』と『啼笑因縁』に勝るとも劣らない。このため，二人の作家の北京経験という内部要素は，彼らの北京イメージ描写の質と量に対して決定的な原因とはなっていないと結論づけられるのではないか。

なお他の二作と比べて『金粉世家』の北京イメージ描写は相対的にも大幅に少ないといえよう。その原因には二点を指摘できるだろう。まず，『金粉世家』に出現する多数の虚構の場は，前述の通りこの統計の対象外としている。例えば，主人公らの住所である「烏衣巷」「落花胡同」「圈子胡同」，葬儀場である「南平寺」，社交活動の場所である「西来飯店」などがそれに該当する。一方，『啼笑因縁』では，虚構のイメージが出現する比率は『金粉世家』よりも低く，『北京好日』では虚構のイメージはほとんど出現しない。

それではなぜ『金粉世家』は多数の虚構のイメージを導入したのか。北京の新聞社で記者または編集者として勤務していた張は北京社会各方面を熟知し，社会の時事問題を収集しこれを素材として小説を創作したため，彼の小説の内容は実在の人物と事件に取材していると，発表当時からときどき議論されていた。張自身も「……知道以当时人，運用当时社会情形写小説，要特别加以小心。写小說的人是信手拈來，……而人家会疑心你是有意揭發陰私的。」（当時の人により当時の社会出来事を利用して小説を書く

際には，特に気をつけねばならないことは知っていた。小説を書く人が手当たりしだい取り出すと，人は故意にプライバシーを暴いたかと疑うのである。）と語っている[18]。『金粉世家』は総理の大家族を描くため，北京の特定の官僚家庭をさすのではないか，という読者の過度な好奇心をかき立てる恐れがあり，作者は意識的に数多くの虚構のイメージを使用したと推測できる。『啼笑因縁』は南方の読者に北京を物語るものであるため，こういう作者の顧慮はほとんど見られない。

また，先に述べたように，張は『金粉世家』の北京読者と同じコンテクストのなかにいて，北京在住者として北京に関する情報を共有するため，わざわざ北京の都市イメージを一つ一つ紹介する必要がなかっただろう。そのため，『金粉世家』では，北京イメージにただ言及しただけということが多い。『啼笑因縁』と『北京好日』はこれとまったく異なり，作家は北京以外の読者に北京を物語っており，その場合，なるべく北京の特徴を描きだそうとし，都市イメージの由来，現状，風景，機能を詳しく説明する傾向を示している。事実，当時の『啼笑因縁』の南方読者が北京へ旅行するときには，必ず天橋を訪れたと言われており[19]，この一事からも『啼笑因縁』の「天橋」に関する描写がいかに魅力的であったことがわかるだろう。総じて，三作のイメージの総数上の差異は主に作品創作背景と読者グループ，つまり作品の個性によるものである。

次に，イメージの重要構成要素であるディストリクト，ノード，ランドマークをさらに整理し，イメージ形成の内部要素と外部要素が結びついて作用する点を検討してみたい。

（一）三作のディストリクト出現回数を合計すると，頻度の高い順で，中央公園（27 回），西山（22 回），北海（11 回），北京飯店（9 回），天橋（9 回），故宮（7 回），頤和園（7 回），東交民巷（7 回）と並ぶ。描写を伴う出現する頻度の高い順では西山（6 回），北海（3 回），天橋（3 回）と並ぶ。

18） 張恨水「写作生涯回憶」十八。張占国ら編集：『張恨水研究資料』，天津人民出版社 1986 年，頁 39。

19） 劉東黎『北京紅塵旧夢』人民文学出版社 2009。

この二つの傾向は以下の三点を示唆していると考えられよう。

（1）民国期に開放された旧清朝皇室の空間イメージが非常に魅力的であり，二人の作家はしばしばこれらの空間に言及し，意識的に描写を伴う出現する回数がもっとも多い。最も早く開放されたのは社稷壇を改造した中央公園で，1915 年のことである。その後，先農壇，故宮博物院，北海，中南海，天壇が次々に開園した。1929 — 35 年各公園の入場券の価格を整理すると，頤和園は最も高く，460 銅元で，中央公園（1928 年以降中山公園と改名），北海，中南海はいずれも 20 銅元である。そして人気指数を見ると，1935 年の入場人数は，中山公園（519189 人），北海（465002），頤和園（37465）と続き[20]，市内にあり入場券の安かった中山公園と北海は大人気であったことがわかる。その状況は三作品における出現頻度と一致しており，この入園料とアクセスの容易さもイメージ形成の重要な外部要素といえよう。かつては立入禁止であった皇室空間は，快適な遊覧地のイメージが非常に色濃く，北京の代表的なイメージとなっている。頻度のもっとも高い中央公園，特にその園内の來今雨軒という建物は，当時の文化人のサロンであり，彼らが作品を構想し創作するところでもあり，張も林もよく出かけていた[21]。民国期における開園と文化人である張と林の当地への訪問とは，同空間の高い出現頻度の外部要素と内部要素となったと解釈できるだろう。注意すべきのは，このようなディストリクトが外観はかなり伝統的だが，公園としての機能はまったく近代的である点であろう。

（2）西郊の山水人文景観は北京城内からは遠く交通も不便だったが，北京イメージに効果的に参入している。西山，頤和園の一帯は北京城から 10 キロ以上離れているにもかかわらず，北京市民の車，馬車などによる

20） 許慧琦『故都新貌：遷都後到抗戰前的北平城市消費（1928-1937）』臺灣學生書局 2008 年，頁 137。

21） 張は『啼笑因縁』の自序のなかで，來今雨軒で小説を構想したと記述している。林は來今雨軒で開催された文芸サロン「語糸」社に参加したこともある。林太乙『林語堂伝』，『林語堂名著全集 29』，東北師範大学出版社 1994 年，p46。

遠足の目的地となっていた。そのなかでも，香山，頤和園は元の皇室空間から改造された近代的公園であり，西山八大処という寺院の集まりは民国以前でも有名な巡礼地であった。

（3）北京飯店，東交民巷のような近代的イメージも印象強くしばしば出現する。北京飯店の建物は王府井商業区にある 1917 年に建造された 7 階のフランス風のビルであり，民国時代において上流社会の社交活動の場所である。東交民巷は大使館区であり，外国関係のディストリクトである。

（4）近代的な公園，ホテルのような中上層階級の空間以外，天橋，什刹海のような中下層民衆の空間も作家の注目を引いていた。天橋市場は 1914 年設置され，のちに最大の平民市場となり，演芸活動も行われる場所であった。什刹海は内城の湖で，民国以前でも平民の休憩所であった。文化人である張と林は上層社会に進出していた一方で，作品のなかに下層民衆の楽園である空間も興味深く取り込んでいる。中上層階級という身分にもかかわらず，彼らは北京イメージを全面的に描きだそうとしている。ただし，三作はいずれも上層階級を主人公として，主に上層階級の生活を描く作品であるが，そこには相違点がある。この下層民衆の空間イメージは『金粉世家』のなかにはまったく出現しないのに対し，『啼笑因縁』と『北京好日』のなかでは単に言及するだけでなく興味深い様子で描写されている。『啼笑因縁』と『北京好日』における天橋・什刹海描写の章節からは，上層階級の主人公がわざと気分転換に，平民の空間である天橋と什刹海へ行き，下層民衆の空間を好奇的な目差しで鑑賞する傾向が見られる。この見慣れぬ風景と人物に対する興味は，北京の物事に関心を抱く中国南方読者と欧米人とにより共有されていたと推測できる。また，北京以外の読者に北京の風景を呈するため，作家はできる限り全面的に北京を描こうと努力したのであろう。

（二）ノードは主に交差点（牌楼），故宮の城門（東華門），内城の城門（前門など），外城の城門特に西向きの城門（西直門，西便門）として表れている。ディストリクトの西郊はすでに北京イメージの切り離せない一部となっているため，このようなノードは実に北京内部（西郊が含まる）の移動路線を提示し，活動範囲を制限するといえる。唯一の例外は汽車で北

京を出る際に現れる東便門およびそれとつながる鉄道駅である。他の三方向の外城の城門が二人の作家によって無視されたことは，イメージ形成の内部要素，つまり作家の主体的活動範囲と認知地域を反映するものであろう。

（三）ランドマークには，西郊の自然の山と城内の高い建築物という二種類がある。注目すべきは，城内のランドマークは全て城門，塔，鼓楼のような伝統的な建物であり，近代的イメージ，例えば鉄道駅，ホテルなどはまだ方位指示の機能を有していなかった。また，主要なランドマークである鐘鼓楼，景山，天安門，中華門と前門は，北から南へと走る北京城の中心線にあたる。この中心線は15世紀に明朝が北京城を建造する際から定められていたであり，1920年代から30年代にかけて製作された三作品においても方位指示のランドマークとして驚くほどの安定性を示し続けている。このように，ランドマークに基づく北京の都市イメージは当時も伝統的に構成されたと考えられる。ちなみに，張恨水は1919年に初めて北京へ着いたとき，前門の鉄道駅を出て，雄壮な前門に遭遇し，震撼させられたという[22)]。

三　結論

三作における北京イメージ形成をさらに整理すると，伝統的なイメージが近代的イメージと比べてより感知されやすいと概括できる。全70種のイメージのなか，近代的イメージは東安市場，北京飯店など6種，近代的改造が行われたが主に伝統的なイメージは中央公園など11種のみであり，それ以外は全部伝統的なイメージなのである。これは外部要素と内部要素との共同作用による結果であろう。

北京は最初から国家によって計画営造され，何百年もの間帝国の首都として独自性を持ち続けたため，この計画性，安定性という遺産がもっとも感知されやすい外部要素となるのは当然だろう。一方，北京は民国初期の首都としての期間に近代化に向けて改造が緩やかに進んだが，1928年南

22）　张伍『我的父亲张恨水』，春风文艺出版社2002年，頁68。

京遷都後，都市の近代化はほぼ停滞した状態であり，その安定していた遺産はほとんど開発破壊されることはなかった[23]。そして故宮，皇城，旧皇室園林，城壁と城門などの皇室の雄大なイメージはどんな主体（作家自身と作品の主人公）によっても無視できないイメージとなっている。

三作品が創作された時期はほぼ北平時期であり，三作品における伝統イメージ優位という北京イメージはこの時期の政府と文化界の「文化古都」の共同努力とぴったり一致する。首都の地位を失ったため経済が不景気になった北平は，観光旅行を発展し経済を促進せねばならない。このため，1933 − 35 年袁良が北平の市長に就いていた間，名所旧跡を保護し，故都の雰囲気を営造し，観光客を誘い，「世界文化の遊覧区」を営造する努力がなされたのである[24]。この時期には北平旅行の指南書も続々と出版され[25]，そのなかでも馬芷庠編集，張恨水審定の『北平旅行指南』は著名であった。一方，「文化古都」の北平を描写した文学書も勢いよく出現した[26]。このようにして，北京はまだ伝統的気風に富む都市であると人々に認知されたのである。

張と林が属している文化人階層は，当時北平の文化消費の中核となる力といえる。多数の文人学者は，南京に従い南下する代わりに，文化的中心としての北平へ関心をもち，北平の学術と教育のよい雰囲気を維持していた。彼らはこのような主体の興味と趣味により，伝統的気風に富む都市の

23） 1915 年に交通不便のため，前門地域の城壁が一部に取り壊された。当時社会から大反発を招いた。（史明正著，王業竜，周衛紅訳，楊立文校『走向近代化的北京城：城市建设与社会変革』，北京大学出版社 1995 年，頁 86。）1924 年以後，電車線路が設立されるため，牌楼を撤去する計画があったが，反発が強かったため撤去計画がキャンセルされた。（同書頁 275。）

24） 王均「現象与意象：近現代时期北京城市的文学感知」『中国歴史地理論叢』，第 17 巻第 2 輯，2002 年 6 月。

25） 1929 年北平民社『北平指南』，1935 年北平市府『旧都文物略』，1934 年北寧鉄路局『北平旅遊便覧』，1936 年経済出版社『北平旅行指南』などがある。

26） 例えば，味橄『北平夜話』中華書局 1936 年，上海「宇宙风」雑誌「北平特辑」1936 年。

景観を鑑賞しながら，ゆったりと時間を消費するという北京独自の理想的都市イメージを構築しようとしていたものと推定できる。本稿が取り上げた三作品が，公園，遊覧地などの憩いと娯楽の場所としてのディストリクトとそれを連接するパスの交差点であるノードを多く描いたのもそのためであろう。また張・林両作家は，近代化がより進んだ上海を中心とする南方読者と欧米の読者の期待を考慮する主観的要素に基づき，意図的に伝統的気風に富む北京を古き良き中国伝統文化の代表的都市として呈示したのではないだろうか。